

～今月の花木～



マルバデイゴ 丸葉梯梧

マメ科・落葉小高木・園芸品種

ブラジル原産のアメリカデイゴ(別名、海紅豆)の園芸品種である。関東以南の暖地に植えられる。



ゴミ集積場のネットでは、ありません(裏面の記事をご参照ください)

サクラなどの幹を食い荒らす、外来カミキリ

サクラ、ウメ、モモなどの幹の内部を食い荒らし、被害がひどくなると木を枯らしてしまう「クビアカツヤカミキリ」による被害が問題となっています。

「桜がピンチ!花見が出来なくなる」など一部報道等でクビアカツヤカミキリによる被害を御存じの方もいるかと思いますが、いったい何が問題なのでしょう。

このカミキリムシの孵化した幼虫はイモムシ型で、樹皮に近い幹の内部に侵入して食べ進みます。樹木は樹皮に近い場所で養水分を運んでおり、この部分を食害されると樹木は上の方へ養水分が行かなくなり、衰弱して枝枯れや最悪枯れてしまう事もあり、被害木の倒木や枯枝落下等の人的被害も懸念されます。

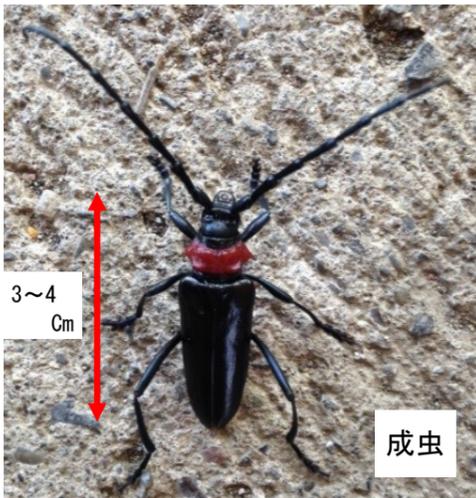
外来種であるクビアカツヤカミキリが特に問題なのは驚異的な繁殖力です。日本在来のカミキリは一匹あたりの産卵数は100個程度に対し、本種は多いもので1000個を超えるものとされます。2012年に愛知県で、2013年に埼玉県で本種の成虫が確認されて以降、2016年までにはさらに群馬・栃木・東京・大阪・徳島でも確認されています。幼虫は樹木の中で2〜3年かけて育つことから、さらに多くの地域に拡散している可能性もあります。

また、サクラ・ウメ・モモなどバラ科樹木でかつ観賞価値や生産価値の高い樹種で多く発生している事も問題です。

各地で被害が拡大している今、対策を講じなければ手遅れになるのは事実です。本種の特徴や防除対策などは以下の記事をご参照ください。

クビアカツヤカミキリについて

対策をする場合、まずは相手を知ることからはじめられます。成虫はわかりやすいですが、幼虫がいる場合、サインがあります。



成虫



成虫



フラス



フラス

大量のフラスが本種被害の特徴



幼虫(通常、樹木の外から見えない)

生態: ・産卵数が他のカミキリムシよりも極めて多く、繁殖力が高い(1匹の産卵数は100~300個ともいわれ、転々と産み付ける。1000個産卵するものもある)

・6~8月に交尾後の雌成虫により、樹木の割れ目に産み付けられた卵は、8~9日後に孵化し、幼虫は樹木内を摂食する。幼虫は2~3年程度、樹木内を穿孔食害し成長したのち、蛹となり6~8月頃成虫となって樹木の外に出る。

・幼虫は樹木の内部を摂食した際、フラス(幼虫の糞と木くずの混合物)を排出する。幼虫がいるサインでもある。

和名:クビアカツヤカミキリ

(名前のように首が赤く見えるという特徴だが、昆虫の体のつくりで言えば正確には胸部が赤いため、ムネ[胸]アカツヤカミキリでも良い気がする)

別名:クロジャコウカミキリ

(ジャコウ[麝香]とあるように、成虫は柑橘系の強烈なおいを発する)

学名: *Aromia bungii* アロミア ブンギ

自然分布: 中国、モンゴル、ロシア、朝鮮半島、台湾、ベトナムなど、南北に広く分布している

(日本がすっぽり入る位の多様な気象条件下で生息できる外来種であるのも厄介である)

侵入経路: 不明とされるが、木製の輸入梱包資材やパレットなど、物流による可能性が指摘されている。

形態: 成虫は触角抜きで体長3~4cm。体全体が艶のある黒色で、前胸背板は赤色。雌は雄よりやや大きい。触角の長さは、雄は体長の2倍近く、雌はほぼ体長に等しい。カミキリムシとしては大型の部類に入る。

加害対象: サクラ類やウメ、モモなどのバラ科樹木のほか、ヤナギ、コナラなどの広葉樹(日本での被害は主にサクラ・ウメ・モモ、中国では桃類を加害する果樹害虫として知られている)



防鳥ネットによる、成虫の拡散防止対策。



ネット内のカミキリシ採取を禁止する看板。勝手に採取すると窃盗罪になるらしい。



根元はネットの裾を内側に織り込み、ペグですき間が出ないように固定している。



樹木の上部は結束バンドなどで、すき間が出ないように固定している。



根元にフラスが大量に排出されていた。(ネット越しで撮影)



成虫が出てくる際、細長い穴を幹にあげて出てくる、脱出痕も見られた。



フラスの特徴は、ひき肉状に連なって出ることが多いが、枯木からはバラバラと出てくる。



根元付近だけでなく、樹木の上の方でも被害が見られる場所があった。

去る6月12日、関東地方では比較的早くクビアカツヤカミキリの発生と被害が確認され、防除対策も実施されている、埼玉県草加市の葛西用水の桜並木を訪ねました。現地の桜には根元から樹高1.5m付近までに青色のネットが巻き付けられているものが多数あり、目的を知らなければゴミ集積場のカラス除けネットにも見えなくは、ありません。

このネットの目的は樹木内から出てくる成虫が拡散しないようにするものです。目開き4mm以下の容易に切れない防鳥用ネットなどを使用し、出来たカミキリシにネットが噛み切られないよう、ゆとりを持たせて巻かれています。また、上下は隙間が出ないようにペグや結束バンド等で固定されています。

定期的に見回り、ネット内に成虫がいたら補殺し、拡散と産卵を阻止しています。すぐに捕まえないとネット内で交尾して産卵してしまう事もあるようです。

なお、ネット内のカミキリシ採取は拡散防止のため、関係者以外禁止されています。珍しく、見た目もカッコいい？カミキリシのため、一部の昆虫マニアが採取することがあるようです。現地でネットなどを観

察していたところ、怪しい人と思われたのか巡回中の市役所の方に声を掛けられ、成虫や被害と防除活動を見たいとの目的を説明したのち、少し話をすることが出来ました。

「被害のピークは4年前、今ネットを巻いている木は過去のフラスの量などから巻く木を決めている、今の時期は毎日巡回している」などの話を聞くことが出来ました。

この日は期待していた成虫を見つかる事は出来ませんでした。何箇所かフラスが発生している箇所や成虫の脱出痕など観察できましたが、それは被害が終息していない証でもあります。

クビアカツヤカミキリの防除方法

・成虫を見つけたら、補殺します。単純かつ確実に効果がある方法です。しかし、言うのは簡単ですが、要は捕まえてハンマーや石で撲殺したり足で踏み潰したりする事であり、虫が苦手な人には抵抗感があるのは否めません。ちなみに成虫の発生時期は6月～8月にかけてです。

・樹木の内部を食い荒らす幼虫を退治するには、薬剤注入が効果的です。本種に対応する殺虫剤の一例として、商品名「ロビンフード」(写真参照)という薬剤が市販されており、フラスが出ている穴を千枚通し等で清掃し、その穴にノズルを差し込み噴射注入します。その後は見回りをして、フラスの排出がなくなるまで実施します。(薬剤ラベルの使用回数厳守)



・6月～8月に、成虫の拡散と産卵防止のため、ネットなどを樹木の幹に巻き付け、定期的に見回り、中の成虫を補殺します。(詳しいやり方は、草加市の事例を参照)

・幼虫の食害痕や成虫の脱出痕が複数確認され、衰弱もしくは枯死した樹木は伐採処理をすることが望ましく、焼却処理が基本です。また6月～8月にかけては、運搬途中での成虫の脱出→拡散の恐れもあり、特に注意が必要です。

・伐採後の切株に穴が開いている場合は内部に幼虫がいる可能性があり、穴に殺虫剤を噴射し、ネットなどで切株を覆い、成虫の脱出にも備える必要があります。

幼虫でも成虫でも見つけ次第、速やかな処置が大切です！

クビアカ、コスカシバ、アリ???

クビアカツヤカミキリの幼虫がいる場合、フラスが出ている話をしてきましたが、サクラの木には時折似たようなものが見られる事があり、以下に例示します。

アリ

樹木の傷んだ(腐った)場所から木くずがバラバラ出ていて、かつ、アリが周辺にいる場合は、そのような場所に巣を作っています。但し、通常アリは健全な木の部分は食害しません。



コスカシバ

幼虫は樹皮下に侵入し、虫糞と樹脂(ヤニ)が混ざった状態で排出することが多く、サクラに多く見られます。フラスだけの場合は顆粒状で少量です。従来からいる害虫です。

